

第三章

『魏志倭人伝』の概要

百船^{モモフネ}の 泊^ハつる対馬^{ツシマ}の 浅茅山^{アサジャマ}

時雨^{シグレ}の雨に もみたひにけり

〔万葉集3697〕

「たくさんの船が停泊する津（港）で
はないが、対馬^{ツシマ}の浅茅山はしぐれの雨
に色づいている」

新羅^{シラギ}へか 家にか帰る 壱岐^{ユキ}の島

行かむたどきも 思いかねつも

〔六鰭^{ムサバ}（万葉集3696）〕

「新羅へ行くか家に帰るか、壱岐では
ないが行くべき手段も思いつかない。
（壱岐^{ユキ}は行きにかけられた枕詞）」

大船^{オオフネ}に 真楫^{マカジ}しじぬき この吾子^{アコ}を

唐国^{カラクニ}へやる 斎^{イハ}へ神たち

〔光明皇后（万葉集4240）〕

「大きな船に櫓をたくさんつけてこの
子を唐の国へ派遣します。神々よう
かお守りください。」

（光明皇后が遣唐大使として出発する
甥の藤原朝臣清河に賜った歌）」

三・一

議論の少ない対馬から奴国まで

『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}は戦後の日本ではとても有名になっていて教科書にもでてくるので、名前と大まかな内容については、ほとんどの読者がごぞんじと思う。

三世紀の前半——現在の日本の歴史用語でいえば弥生^{ヤヨイ}時代のおわり——における日本のありさまや魏^キの国との交流の様子を記した史料である。

ただ、その文章を最後まできちんと読んだ人はすくないかもしれないので、その内容について、簡単におさらいしておく。

くわしいことは、数多くある翻訳書でお調べいただきたい。

文庫判で翻訳文が十頁ほど、原文だとその半分にもならない量のものである。

断片的な知識を無理につないだような短い文章で、論理的にきちんと筋が通る話ではなく、何種類にも解釈できるはしよった文章——何種類にも意味がとれるのが漢文の大きな欠点とされる——なのだが、とりあえず、概要を述べておこう。

◎金印発見で裏づけられた前文

話の出発点は、いまの韓国のソウル付近一帯の帯方郡^{タイホウ}で、ここは当時は魏の国の植民地になっていて、シナ王朝が朝鮮半島近辺を統率する拠点だった。まず、

「倭人（日本人）はこの帯方郡の東南の大海に住んでいて、そこには国々があり、もと百余国だった。漢のとき（西暦一世紀半ば）に使者が来た。いま使者や通訳が来る国は三十ほどある」

——という前文があり、ついで帶方から九州本島の北端部までの行程——と思われる——記録とその土地と住民の様子や役人の名前などが記されている。

漢のときの使者というのは、教科書にかならずといっていいほど出ている「金印」の発見によって裏づけられている。

すなわち、江戸時代に博多湾の志賀島から「漢委奴國^{カンワノナノコク}王^{オウ}」と刻まれた金印（委は倭ともいわれる）が発見されたが、これは、シナの正史・後漢書倭伝^{ゴカンジョウワデン}にある、

「西暦五七年后漢光武帝が都の洛陽にきた日

本の使者に金印を授けた」

——という記事に対応したものだろう、といわれているのだ。

金印にある「奴國^ナ」とは、いまの博多湾岸であることは多くの学者がみとめている。

これが別のときの「金印」だったとしても、ひじょうに古い西暦紀元前の弥生時代半ばにすでに、日本の豪族たちがシナや朝鮮の役人や商人たちと、海を渡って活発に交流していたことは、確からしい。

ということは、九州と大和の交流はもつと盛んだったということの意味しているのだが、この「金印」のほかにも、西暦紀元前にシナ大陸で作られた鏡や剣が各地の遺跡や神社に残されているし、弥生青銅器の材料も多くは大陸産である。

『魏志倭人伝』にもどって、九州北端部についたあと、日本本土内に入ってから個々の国についても、同様に行程や国の有様が記されている。

行程とは、次ぎの国に行くのに、どちらの方角に何里とか何日とかいうもので、また有様は土地柄とか家の数とか風俗とか役人の名前とかである。

ただし記述はごく短く単純であり、理解に苦しむことが多い。

以下おおまかに説明する。

◎朝鮮半島と対馬と壱岐

帶方郡^{タイホウ}から海岸に沿って朝鮮半島を南下したり東に向かったりして七千里ほどゆくと、狗邪韓国^{クヤカンコク}につく。これ

はすでに倭国の一部であると読みとれる記述がなされている。

それから千里ほど海を渡ると対馬国^{ツシマ}に達し、さらに海を千里渡ると一大国に達する。そこからさらに千里の海を渡ると、九州本島北端部に到達する。

狗邪韓国というのは朝鮮半島南端部にあった弁韓^{ベンカン}に含まれる加羅^{カラ}と考えられている。

ここは日本が六世紀まで権利を持ち日本人がたくさん住んでいた任那^{ミヤナ}とほぼ同じ地域で、現在の韓国の地理でいうと慶尚南道金海地方（鎮海湾北方）である。

ひじょうに古い時代——三世紀前半——にすでに朝鮮南部が日本の勢力下にあつて任那の原型ができていたらしいことがわかる記述である。

つぎの対馬国（対海国とした書もある）は日本の対馬であることが確実で、一大は一支の誤写ともいわれ壱岐^{イクキ}であることが確実とされている。

七千里とか千里とかいう距離の単位の「里」については、魏の時代の一里が四三五メートルなので、これで数えたという説が有力だが、他にもさまざまな議論があり確定していない。

いずれにせよ現在の日本の「里」よりずっと短いが、こういう短い「里」で考えても、七千里とか千里といった数値は過大である。

しかし三世紀に厳密な測定ができたとは考えられないし、過剰表現はシナ文書の通例でもある。

対馬や壱岐の官（役人）は卑狗^{ヒコ}、副官は卑奴母離^{ヒナモリ}とい、人家は千余と二千ほどであり、人々は海産物を採り、米は船で買い入れて生活している——とある。

とうじの人たちが九州から朝鮮南端まで、対馬と壱岐を経由して往来していたことについては、多くの史家が確かだとしており、これについて異論を述べる人はほとんどいない。

官の名については、推定しかありえないが、卑狗^{ヒコ}は「・彦^{ヒコ}」のヒコを官吏名と解して記したものであり、卑奴母離^{ヒナモリ}は「夷守^{ヒナモリ}」だろうという説がむかしからある。

「彦」は貴人の末尾につく尊称だが、本来的に首長という意味を含んでいるので、敬称としてそれのみで呼んでいたのかもしれない。

夷守^{ヒナモリ}とは、辺境（鄙^{ヒナ}）を守護する役人のことで、『記紀』に出ている役職名である。

この卑奴母離はあと二回でてくる。

◎末廬国く伊都国く奴国

さて九州本島北端部に着いてみると、そこには末廬国があり、人家は四千余である。人々は魚や鮑をとるのが得意である。

ここから陸を東南に五百里すすむと、伊都国につく。官を爾支、副官を泄護觚および柄渠觚という。

この官名の爾支は『記紀』にでてくる「根子」だろうといわれている。

根子とはその土地の基礎をつくった——といった意味の尊称で、第七く九代の天皇の御名に入っているし、また各地の要人の名にもつけられている。

人家は千余で、帯方郡から使者がきたときは、みなこの伊都国に駐留する——と記されている。重要な国だったことがわかる。

（以下官名の日本語との対応については諸説ありすぎるので説明は簡単にしておく）

この伊都国のところに、国には国王がいてみな女王国に属している——という興味ぶかい文章があるが、属しているのが伊都国の歴代国王なのか、他の多くの国々もそうなのかが読みとれず、いろいろな意見がある。

国王と官（役人）の関係もいまひとつはつきりしないが、王と行政官の長ということであろうか。また地方豪族の長と中央から派遣された監督官ということかもしれない。

伊都国からさらに東南に百里すすむと、奴国に達する。官の名は兕馬觚で、二万余の人家がある。

副官を卑奴母離という。

九州本島についてからのこの三つの国がどこだったかについては、古い地名の発音との照合や『記紀』や『万葉集』や考古学的知見によって、かなり判明している。すなわち末廬国は『古事記』でいう末羅、『日本書紀』にある松浦県で、現在の東松浦半島やその付け根の唐津のあたりである。

『日本書紀』には（神功皇后）が神意をたずねた場所として出てくる。

松浦の読みは一般にはマツウラであるが、現在でもマツラと読む人名や地名がたくさんある。

唐津は加羅津であり、朝鮮半島の加羅の国と連絡する港という意味をもつとされている。

伊都国は今の糸島半島のあたりとされ、『日本書紀』にも「神功皇后」が臨月を石で抑えた事績のところで伊都国として出てくる。伊都と名づけたのは仲哀天皇ということになっている。

そして奴国は那珂川のある博多湾の周辺のように、『日本書紀』の宣化天皇紀では博多湾のことを「那津」としているし、仲哀天皇紀ではこのあたり一帯を「難県」と記している。また那珂川を「難河」とも記している。

さらに名島という島もある。

奴国の読みは、ナコクではなくヌコクかもしれないし、その中間かもしれない。

千八百年も前のシナや日本の発音が正確に分かる筈はなく、本書にしめすもろもろの読みは、比較的賛同者の多い推定にすぎない。

この奴国は、西暦五七七年に金印を贈られた倭奴国の後継なのであろう。金印の発見位置も、この奴国の内部で

ある。

◎北九州地図での確認

この三国のおおまかな位置を、図3・1に示しておいた。



図3・1 『魏志倭人伝』の経路でほぼ意見の一致する北九州部分

奴国の中心は橿原の中心ではなく上の方だったかもしれない。

参考までに、金印出土地と吉野ヶ里遺跡ヨシノガリの場所も図示しておいた。このあたりにはさまざまな遺跡や古い地名があり、弥生時代から重要な地域だったことが推理できる。

三国のうち、奴国の中心位置については、多少の異論もあるようだが、末廬国や伊都国のありかについては、異論はほとんど無いようである。

このあたりは日本から見て半島や大陸に渡る拠点であり、同時に防衛の拠点でもあり、とくに伊都国は重要な場所だったらしい。

＊

さてここまでは、『魏志倭人伝』の記録と日本側の『記紀』や古い地名などさまざまな史料とほぼ一致するのだが、ここから先の多くの国の所在が急に分からなくなり、『邪馬台国』九州説」と『邪馬台国』大和説』との間で論戦がなされることになるのである。

三・二

議論百出の奴国から先

◎不弥国→投馬国→《邪馬台国》

議論百出の奴国^ナから先について、とりあえず、順に記してみる。

奴国から東へ百里行くと不弥国^{フミ}（またはフビ）があり、人家は千余で官は多模^{タモ}、副官は卑奴母離^{ヒナモリ}である。

不弥国の位置は、九州内部か関門を渡ったところか決定打はないようだが、小規模な国だし百里というのはたかだか数十キロだから、この距離を信じれば、いずれにせよ奴国のすぐ近くが想定される。

一説によると、発音から宇美町^{ウミ}あたりではないかとされる。宇美は図3・1の奴国の楢円の右端あたりで

ある。そのほか南東の太宰府^{ダザイフ}、北東の津屋岬^{ツヤ}などいろいろな説がある。

津屋岬は玄界灘に面した小さな岬で、図3・1の地図の楢円の北端小円部だが、そのすぐそばに福間^{フクマ}という土地があることが根拠のひとつである。

帯方郡^{タイホウ}からこの不弥国^{フミ}までは、どれだけ離れているかはすべて「里」を単位にした距離で記されている。つまり——正確かどうかは別にして——まともな書き方がなされている。

ところが不弥国から先は、距離ではなく、「日数」によってその離れ方が表現されるようになる。

そのため、『魏志倭人伝^{キシワジンデン}』の編者に資料を提供した人物は、北九州までは来たが、その先には行っておらず、日本人から聞いた知識によって推理したのだろう——という説が多くある。

ともかく続けてみよう。

不弥国から南へ水上を二十日行くと投馬国^{トウマ}（またはツマまたはヅマ）がある。官を彌彌^{ミミ}（またはビビ）、副官を彌彌那利^{ミミナリ}といい、五万もの人家がある。

この数がほんとうだとすると、弥生時代としてはずい

ぶん大きな国である。

さらにそこから南にすすむと、問題の《邪馬台国》^{ヤマトイコク}に達する。

この国は女王が都をつくっているところで、水上十日陸上一月がかかる——と記されている。

官は伊支馬^{イキマ}が長で、その下に彌馬升^{ミマシヨウ}、彌馬獲支^{ミマカクキ}、奴佳鞮^{ナカタイ}などがおり、人家は七万である。

◎《邪馬台国》の謎に直面

こうして遂に、女王のいる《邪馬台国》^{ヤマトイコク}が出てきたことになるのだが、その方位と距離が問題なのだ。

不弥国^{フミ}の位置もはつきりせず、投馬国^{トウマ}の場所もまた謎であるが、もし『魏志倭人伝』^{キシワジンデン}の方位と距離をそのまま信じれば、投馬国も《邪馬台国》も九州の南の海中になっってしまう。

そこで、じつにさまざまな解釈が出され、議論が百出し、決着がつかないのである。

記述をそのままいまの地図にあてはめると、《邪馬台国》は外国になってしまいかねず、ある学者のようにイ

ンドネシアにある——という説まで飛び出してしまふ。そこで、「九州説」では、距離の解釈を工夫して九州内にあるとするし、「大和説」では方位を変更しさらに距離も一部変更するのである。

この問題については、あとで詳述するので、ここでは二、三の修正意見のみ記しておく。

そのひとつは、投馬国から《邪馬台国》まで行くのに水上十日に加えて陸上を一月かかるというのは、たとえば「大和説」であつてもあまりにも長すぎるので、一月は一日の書き間違え（写し間違え）だろうという意見である。

投馬国は読みの推測（トウマまたはズマ）から、「大和説」では出雲^{イズモ}か但馬^{タジマ}ではないか——と考えられている。地理や大きさから出雲のほうが有力だが、出雲説における読みの類似については、イズモ→ズモ→ズマ→投馬^{トウマ}であろうと推理されている。投にはツやズという音があるのだ。

さいきん出雲や但馬のあたりに巨大な集落遺跡が見つかつているので、この説は考古学的調査と矛盾しないのだが、もしそうだとすると、そこから《邪馬台国》まで

が地理にあわない。

出雲から海を十日行き、さらに同じ方角に地面の上を一月も歩いたら、山形方面まで行ってしまうだろう。

瀬戸内海を船ですすんだとすると、大阪湾についてそこから《大和》まではマラソンコース以下であり、健脚なら半日、ゆっくり歩いても数日でつく。

またさらに、現在よりもずっと川幅の広い河川が大阪湾から奈良盆地まで達していたので、ほとんど歩かなくても《大和》へ行けたはずである。

昔の文書は多くの人は何代にもわたって書き写して保存されるものなので、一日を一月と写し間違えたのだらうという説が出るのはもつともである。

ただし、一月でよい——という説もある。

出雲を経由して日本海がわを通って若狭湾に上陸して大和へ向かう経路——この経路も有望である——を、休み休み歩いたとして、それを大げさに書いたのだらう——という推理である。

この件についてのもうひとつの意見は、水上十日と陸

上一月とは伊都国からの日数ではないか、そして水上を行けば十日で陸上を行けば一月かかるという意味ではないか——というもので、原文があいまいなため、いろいろな仮説が出されている。

◎《邪馬臺國》か《邪馬壹國》か

つぎが、《邪馬台国》^{ヤマトイコク}の台の文字についてである。

原文の《邪馬台国》は《邪馬壹國》と書かれており、壹は壺の正字でイチ、イツ、イなどなので、これをそのまま読めばたぶん「ヤマイコク」である。

古田武彦のようにそのままの読みで考えるべきだとの意見もあるが、それは少数派で、一般には、この邪馬壹國の壹は似た文字なので誤写したのであって、逸文から考えても、原典は「臺（台の正字）」であつた——とするのが定説となっている。つまり《邪馬臺國》だろうというわけである。

著者も、この問題全体を見渡したとき、この誤写説が順当だろうと考えている。

ところで、一般になされている「ヤマトイコク」という読みは現代の日本語風のもので、臺は「ト」とも読むので、「ヤマト」と読まれていたとも考えられる。

つまり《大和》^{ヤマト}とほとんど同じ発音であるとの説が昔から多く出されている。

《邪馬臺國》と畿内の《大和》^{ヤマト}や九州の《山門》^{ヤマト}の発音上の照合は、三世紀のシナでの発音と、三世紀の日本での発音の両方を知らなければできないわけで、それが極度に困難な現状では、おおまかに似ていればよし、としなければならぬ。

碩学として聞こえる田中卓のように、「ヤマトコク」と読むべきだとの意見も多い。

ここでは《大和》^{ヤマト}や《山門》^{ヤマト}を連想させる発音だっただろう——とだけ推定しておく。
くわしいことは第五章に記す。

《邪馬臺國》の本字の臺を現在の簡略文字で台と書き、國も国と略して、一般には《邪馬台国》というわけで、本書でも通例にしたがって《邪馬台国》と記しているが、今にのこる写本では《邪馬壹國》であり、修正意見が《邪馬臺國》であり、その略字が《邪馬台国》であることを、念頭においていただきたい。

なお本書では人名は極力原文どおりの正字で書くことにしているが、『魏志倭人伝』^{キシワジンデン}の最後に出てくる《卑彌呼》^{ヒミコ}の娘の壹與^{イヨ}も正しくは《臺與》^{トヨ}だといわれている。

もちろんあくまでも現在の写本どおりに壹としてイヨと呼ぶべきだ——と強く主張する人もいるが、著者は《臺與》の可能性の方がたかいと感じており、以下では《臺與》としている。

◎国々の一覧

さて、《邪馬台国》^{ヤマトイコク}までの以上の国々については、だいたいの距離や戸数がわかるが、その他については、詳細は不明だとして、《邪馬台国》に達するまでにある、女王国に従属している二十一の国名が並べられている。

そのままを信じれば投馬国と《邪馬台国》の間に二十一の国があることになるが、その一部は《邪馬台国》の周辺に点在する国なのかもしれない。

またその先——《邪馬台国》の南——には、女王に反

抗している狗奴国（またはクヌ）があり、男王卑彌弓呼がいて、官の名は狗古智卑狗だとしている。

男王の名は、語順が違っていて、ほんとうは卑弓彌呼つまり「・・・彦命」または「・・・彦御子」ではないか——というのが多くの意見である。

それから、^{タイホウ}帶方郡から《^{ヤマトアイコク}邪馬台国》までは、一万二千里ほどだとしている。

ここまで見慣れない名前の国々を記してきたので、整理しておく意味で、一覧表の形に並べておこう。

*

帶方郡（魏の植民地）

←南と東に七千余里

狗邪韓国（弁韓のあたり）

←海を千余里

對馬国（千余戸／官・卑狗、副官・卑奴母離）

←海を千余里

一支国（三千戸／官・卑狗、副官・卑奴母離）

←海を千余里

末廬国（四千余戸）

←陸を東南に五百里

伊都国（千余戸／官・爾支、副官・泄護觚と柄渠觚

← / 国王あり女王国に属す）

←陸を東南に百里

奴国（二万余戸／官・兕馬觚、副官・卑奴母離）

←陸を東に百里

不弥国（千余戸／官・多模、副官・卑奴母離）

←南へ水上を二十日

投馬国（五万余戸／官・彌彌、副官・彌彌那利）

←南へ水上を十日、陸上を一月

←（または一日／または伊都国からこの日数）

邪馬台国（七万余戸／官・伊支馬、その下に

← 彌馬升と彌馬獲支と奴佳鞮／女王が都す）

←（帶方郡からここまでが一万二千余里）

←

←さらに南へ

←

狗奴国（官・狗古智卑狗

← 男王・卑彌弓呼が

← いて女王に服さず）

←

←

←海上を東に千余里

←

倭種の国

←女王国から南に

←四千余里

侏儒国

←東南に船で一年

裸国

黒齒国

(以下投馬国と邪馬台国の間および邪馬台国周辺の国々)

斯馬国

華奴蘇奴国

己百支国

鬼国

伊邪国

為吾国

郡支国

鬼奴国

弥奴国

邪馬国

好古都国

躬臣国

不呼国

巴利国

姐奴国

支惟国

対蘇国

烏奴国

蘇奴国

奴国

呼邑国

(前の奴国と同じ文字)

「倭国は遠方の島々からなり、めぐると五千余里になる」

◎狗奴国の謎と重要性

この一覧のうしろの方の侏儒国などは末尾近くに書かれていることで、かなり空想的であり、まともな論評はできない。

現実的な検討のできる国々のなかで、《邪馬台国》に服していないとされる狗奴国については、「九州説」では読み方から、『日本書紀』にある、天皇を悩ませた九州の熊襲だろうという人が多い。

クマソとは球磨と阿蘇が繋がってできた言葉だという説があるが、クマをクヌと聞いたとすれば確かに狗奴国になる。これは「九州説」にとって有利であるが、著者には何ともいえない。

一方「大和説」にとつての有力な説は、上毛野・下毛野地方——のちの上野・下野地方／現在の群馬県・栃木県

に相当——の豪族だろうというものである。

ケノとクヌが類似していることと、この地方の平定に中央政權が苦勞した話が、『記紀』に多く記されていることから、推理である。

さらには熊野説もあるし、さいきんの発掘状況からは東海地方または愛知・岐阜・近江地方も有力視されている。

大和朝廷より先に《大和》に達して君臨していたとされる《饒速日命》^{ニギハヤヒ}一族の後裔を自認する尾張^{オワリ}一族などが勢力をもっていたこれらの地方は、考古学的調査によって、《卑彌呼》^{ヒミコ}の時代に《大和》と複雑な関係があつたらしいと推理されるようになってきたのだ。

《邪馬台国》の周辺から投馬国あたりまでと考えられる二十一の国については、斯馬国は志摩であろうとか己百支国は伊勢石城であろうとか、苦心の探索が報告されているが、決定打はない。

そもそも原文の国名をどう読むかが明確でなく、かつ日本の古代の地名がどう発音されていたかが曖昧なのだから、科学的な探索はきわめて困難なのだ。

三・三

風俗・習慣・制度

国々の話は以上でおわり、その次に——脈絡無しにとつぜん——倭人（日本人）の風俗・習慣・制度などの記述がでてくる。

その内容は断片的で順不同であり、もつともな面と奇妙な面とが混在している。
はしよって箇条書にしてみよう。

*

01 古くから倭の使者はシナの都に來ると「大夫^{タイフ}」と自称する。

（これはシナ王朝風の官名で、日本の使者がシナの制度に通じていたことを意味するとされる）

02 みな入れ墨をしている。

03 帶方郡^{タイホウ}からの経路で推し量つてみると、倭国（日本）は会稽^{カイケイ}の東冶^{トウヤ}の東方海上にあることになる。

（東冶の東方海上とは沖縄本島と奄美大島の間ぐらいになる。そこに日本の中心があると考えていたらしい）

04 風俗は乱れておらず、衣服は貫頭衣^{カントウイ}のようなもの。

05 稲や絹や綿をつくり、牛や馬はいない。

06 武器には矛^{ホコ}、盾^{タテ}、木弓を使用する。

07 温暖で生野菜を食べ、はだしである。

08 家を建て、父母兄弟は寢所を別にしている。

09 埋葬時には遺体を棺に納めるが、棺を囲う槨^{カク}はなく直接土を盛り上げる。

10 海を渡ってシナに來るときは、死者の喪に服しているような持衰^{ジサイ}という人物をのせ、航海がうまくゆくと褒美をあたえ、そうでないと殺そうとする。

（これは今でも日本にある物忌みのことらしい）

11 真珠や青玉がとれ、山からは丹がとれる。

12 骨を焼いてその裂け目で吉凶を占う。

（これは『記紀』にある龜卜^{キボク}を連想させる）

13 集会での座席には父子・男女の区別はない。

14 酒好きである。

15 身分の高い人への礼儀は手を打っただけである。

(これは神社への拝礼作法の柏手^{カシワデ}(拍手)の原型であろう)

16 寿命は八十、九十、百年という長寿である。

17 庶民でも数人の妻を持つことがある。

18 婦人は淫らでなく嫉妬心もない。

19 泥棒はおらず訴訟も少ない。法を犯すと軽い場合は

妻子を国が取り上げる。重いと殺される。

20 身分の上下の秩序がきちんとしている。

21 《邪馬台国^{ヤマトアイコク}》は人々に税を納めさせ、これを収納する

倉庫がある。

22 国々には市場があつて、物々交換をするが、《邪馬台

国^{ダイワ}》では大倭(役職名?)に命じてそれを監督させている。

23 《邪馬台国》では、自分の国より北にある国々(投馬

国までの国々)に一大率^{イチダイソツ}という偉い役人を送つて国

の様子を検分し、国々はこの役人を怖れている。

24 伊都国^{イト}には常に一大率がいて権勢をふるっている。

25 女王が使者をシナの都や帯方郡^{タイホウ}や朝鮮の国々に派遣

するときや、帯方郡の使者が倭国に来たときは、伊

都国の海岸で文書や贈り物の点検をうけて間違いの

起こらないようにしている。

26 身分の上の人の前で説明する場合には、うづくまつ

たりひざまづいたりして両手を地面につける。
27 受け答えのときの承諾の言葉は「噫^{アイ}」である。

(これは現在の日本語の「ハイ」につながるが、噫は
オク、エイ、エ、イなどとも読むので、はつきりし
たことはわからない)

*

さて次が、有名な《邪馬台国^{ヤマトアイコク}》を中心とした倭国^{ワヨク}の歴
史と女王(卑彌呼^{ヒミコ})の話になる。

ここは重要なものではしよらず、三品彰英^{ミシナシヨウエイ}の訳文をほぼ
そのまま掲載しよう。

「邪馬台国は、もと男子が王であつた。ところが
が男王の治下、七、八十年以前のこと、倭国
は大変に乱れて、国々は互いに攻撃しあつて
年が過ぎた。そこで、国々が協同して一人の
女子を立てて王としたのである。彼女は名を
卑彌呼^{ヒミコ}といい、鬼道^{キドウ}(神霊)に仕え、その靈
力でうまく人心を眩惑している。すでにかな
りの年齢であるが夫を持たず、男弟がいて彼
女の政治を補佐している。彼女が王となって

から後は、彼女を見た者は少なく、婢女千人を侍らせている。ただ一人の男子だけが飲食を給仕するとともに、神託をうけるために彼女のもとに出入りして外に伝える。彼女の居所の宮室は楼観（見張りやぐら）や城柵を厳しく設け、また常に武器を持った人々がいて守衛している。」

じつに興味ぶかい一文である。

この冒頭に、七、八十年前に倭国が乱れた——という重要な記述がある。

これがどの時代なのか問題になるが、後漢書や隋書には、桓・靈帝の時代（西暦一四七年―一八八年）に大いに乱れた——倭国大乱——と記されている。

しかし『魏志倭人伝』を見てそう推理した可能性がある。るので、あまり詮索することはできない。

ただ、古代の強国ができる過程で混乱がおこるのは歴史の必然なので、この倭国の乱自体はふしぎなことではない。

この「乱」以外には、補足説明はあまり必要がない。そして、これ以上の説明がないので、検討や考察はき

わめて難しい。

女王を共立した国とはどこどこか、鬼道とは具体的に何か、はもちろん、男弟とただ一人の男子が同一人物なのか違うのかすらも、決定困難である。

そこで、とくに〈卑彌呼〉とは誰か、《邪馬台国》とはどういう国なのか、この両者の読みは「ヒミコ」「ヤマタイコク」でいいのか、などについて、じつにさまざまな見解が飛び交うことになったのだ。

またなぜか、女王や補佐の男弟の服装や人物像などについては、まったく書かれていない。九州の国々の一般庶民の習俗はいろいろと書かれているのに——である。

このことから、魏の使者は《邪馬台国》までは来ておらず、〈卑彌呼〉には会っていない——という説が有力視されている。

鬼道とは日本を蔑視していた当時のシナでの表現で、これだけだと道教的な幻術を想像するが、その実態は、神に仕えて神託を告げる巫女的な存在——シャーマンとしての存在——だったろうと、『記紀』などの研究からいわれている。

つまり古代の神道における神子（巫女）である。

ただし巫女といっても、いまの巫女とはちがって、高度な政治性と指導性をもって靈感（判断力）を働かせ、神託を告げる、カリスマ的な女性のことである。

政治の政をマツリゴトと読むように、古代においては神々を祀ることと政治とは一体のものであった。

すなわち完全な祭政一致だったのだ。

〈卑彌呼〉の話はこれでとつぜん終わって、つぎに《邪馬台国》の東に海を千里も行くと倭種^{ワシユ}の国があり、その南に侏儒国^{シユジュ}があり、その東南に裸国や黒齒国があつて、そこは船で一年がかりの距離である——という凄い話が記されている。

この裸国・黒齒国は南米にあると真剣に考えている人も多いようだが、科学的な検討は加えようがない。

で、結局倭の地（日本）は一周して五千余里だそうなのだが、といつても一里がどれくらいか分からないし、実測の方法もない時代なのだから、この長さは「かなり長い」としかいいようがない。

一里を四三五メートルとするとほぼ二二〇〇キロになつて、合うといえは合うが、地理的な測定法の無かつた時代のことなので、「かなり長い」としておくのが科学的

な態度であろう。

*

さて、もう終わりに近いのだが、この次にとくべつ有名な事項が書かれている。

魏^キの国と倭の女王——すなわち《邪馬台国》の〈卑彌呼〉——との間の外交交渉の記録である。

これは《邪馬台国》までの経路などとはちがって、魏の都で魏の役人が使いの日本人と面会して記録した史料によるものなので、『魏志倭人伝^{キシワジンデン}』のなかではもつとも信憑性がたかく、重要である。

ただし、この外交記録を理解するためには、この時代の東アジアの勢力分布を知っておく必要があるのです、次の二つの節でその概要を述べておくことにしよう。

三・四

〈卑彌呼〉の時代の東アジア

◎前漢から公孫氏の時代まで

まず図3・2をもらっていただきたい。

これは、『魏志倭人伝』の時代、すなわち〈卑彌呼〉が活躍したとされる三世紀のアジアの、勢力分布の概要を示した地図である。

この時代は、〈卑彌呼〉の話を除いても、日本人にとってもなじみぶかい。

なぜなら、それは魏・蜀・呉の三国が覇権を争った三国時代であり、その覇権争いは後に『三国志演義』という大衆物語にまとめられたが、これを吉川英治が天才軍師・諸葛孔明を主人公にした大長編『三国志』として翻案し、たいへんなベストセラーになったからである。

テレビや映画やアニメに何度もなっているし、劇画・コミックにも繰り返し登場している。

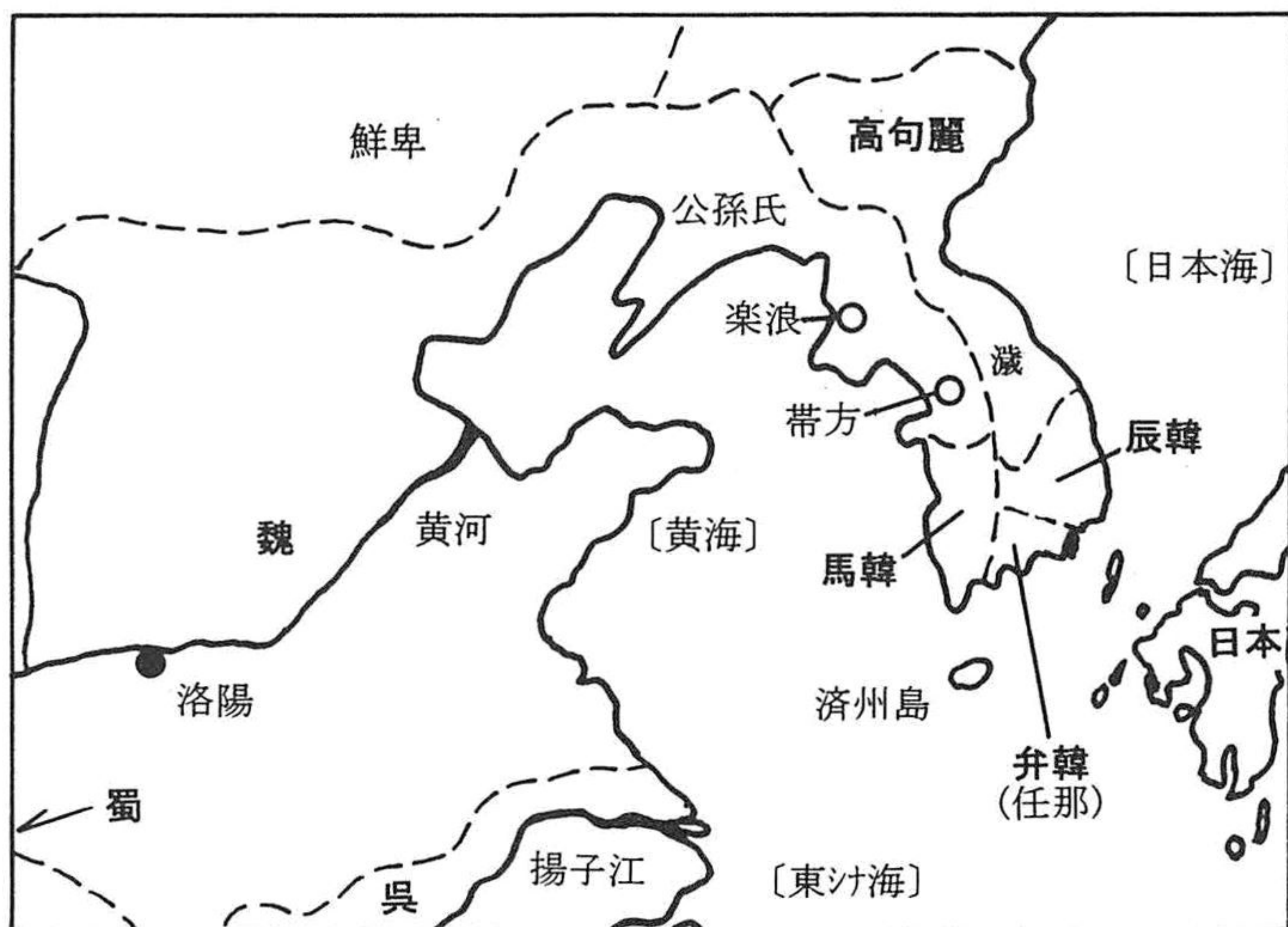


図3・2 『三国志』時代（三世紀）の東アジア勢力図

だから三国時代の覇権争いについては多くの日本人が知っているのだが、そのころの遼東半島や朝鮮半島の情勢についてはピンと来ないことが多いので、簡単におさらいしておこう。

シナ大陸の王朝の交替劇はとても古く、紀元前二千年くらいから話があり、伝説の時代・殷・西周・東周の春秋時代・戦国時代をへて、西暦前二二一年に始皇帝が天下を統一して秦をつくり、万里の長城を築いたりするが、三世になって漢の高祖に滅ぼされ、前二〇二年に前漢が興る。

この前漢の第七代の武帝は有名な名君だが、この武帝が朝鮮半島の経略にのりだし、西暦前一〇八年に半島に楽浪・臨屯・眞番・玄菟の四郡をおき、役人を派遣して、日本を含め半島周辺を支配する拠点とした。

図3・2でいうと、楽浪郡は楽浪のあたり、臨屯郡は東海岸側、眞番郡は帯方のあたり、玄菟郡は北方の高句麗のあたりである。

一方南部の比較的狭い地帯には、馬韓・弁韓・辰韓のいわゆる三韓があり、そのなかさがさらにいくつもに分かれていた。

このうち弁韓の一部が加羅（または加耶）であり、『記紀』にある任那である。

シナ王朝に近い半島北西部はもともとが漢民族の係属国ではあったが、前漢武帝の時代にそれも滅びて、シナ王朝が直接支配する領土が黄海沿岸に大きく広がった。楽浪郡はその南部に位置づけられており、現在の平壤やソウルはこの広大な楽浪郡のなかに含まれていたらしい。

しかし楽浪郡はかならずしも安定ではなく、東の高句麗やその南方の濊に侵されつづけながら、後漢の末期にいたった。

一世紀の西暦五七年に日本の奴国に金印を贈ったのは後漢であるが、そのときの日本の使者（倭奴国の使者）は、この楽浪郡を経由したと考えられる。

同じような使者は、西暦一〇七年にも来て、生口百六十人を献上したと後漢書倭伝に記されている。

この使者を送った国王は帥升とされているが、日本側の『記紀』では照合できない。

たぶん、奴国と同様な北九州の豪族——伊都国など——だと思われるが、大和朝廷だったとの説もある。

後漢末期の西暦二〇〇年近くになると、大陸が乱れ、やがて三国時代に入るのだが、その乱れに乗じて、遼東半島付近の後漢の高級官僚で「遼東太守」だった公孫度が独立して、国をつくった。

独立を決意して遼東侯を名乗って勢力を広めはじめたのが西暦一九〇年だった。

公孫度が二〇四年に死ぬと、子の公孫康があとを継いでさらに勢力範囲を拡張、高句麗を抑えて楽浪郡を手に入れ、その南側を新たに帯方郡と名づけた。

この公孫一族の領土が、地図で公孫氏と書かれている箇所とその左右および帯方郡までであるが、その力は四代にわたってつづいた。

すなわち公孫康の二二一年の死後、弟の公孫恭が西暦二二八年まで、康の子の公孫淵が西暦二三八年まで、権力をもった。

公孫氏が勢力を保っていた間は、日本にとってはシナ王朝との間に公孫の領土があるわけだから、外交の相手は主に公孫氏だったらしい。

問題の〈卑彌呼〉も、西暦二三八年までは公孫氏に使いを送って友誼を確認し、一種の外交をおこなっていた

とされる。

◎公孫氏の滅亡と魏の半島支配

その傍証として、奈良県天理市の東大寺山古墳——天理市から北にかけての大豪族だった和珥氏一族の墓とされる——から出土した中平という年号の刻まれた鉄刀がある。

中平とは後漢の年号で、西暦一八四年から一九〇年にかけて使われた。ちやうど公孫度が国を作ろうしたところである。

しかもこの刀は、中国でも二振りしか発見されておらず、高官以外は持たないような貴重品なのだ。

これがもしシナ王朝からの下賜品であるとする、シナ正史に記録が残っているはずだが、そういう記録は見られない。しかし公孫氏の場合には、すぐに滅亡した辺境の豪族なので、記録は残っていない方が自然なのだ。だから、この宝刀は、後漢からの直接の下賜品ではなく、その間にあって後漢への道を遮っていた公孫氏が、

後漢に対抗して日本を味方につけるための外交の道具として贈った可能性が高いのである。

さて、西暦二二〇年に魏が建国し（都は後漢とおなじ洛陽）、二二一年に蜀が建国、そして二二二年に呉が建国して、三国時代にはいるのだが、しばらくは公孫氏の力はずつき、呉と軍事同盟を結んだりしていた。

しかし西暦二三四年に有名な五丈原で諸葛孔明が病死すると、蜀に攻められる心配が減った魏の力が強まり、魏は朝鮮半島への勢力拡張にのりだす。

三国のうち朝鮮半島に接しているのは魏であり、蜀は遠くはなれているし、呉も東シナ海を介しているので、半島から東への攻勢は魏のみのものであった。

西暦二三七年に公孫氏攻略の軍を起こして撃退されるが、翌二三八年に、司馬仲達が魏の大軍をひきいて攻め入り、ついに公孫氏を滅ぼした。

『三国志演義』に「死せる孔明生ける仲達を走らす」とある、あの軍師・仲達である。

こうして楽浪郡・帶方郡ともに魏の植民地になり、魏の皇帝はそこに役人を派遣して支配した。

この、公孫氏が滅んだ直後の西暦二三八年または二三

九年に、〈卑彌呼〉が使者を、帶方郡を介して魏の都の洛陽に送ったことが、『魏志倭人伝』に出ているのである。

もちろんこれは、朝鮮半島や朝鮮海峡における日本の立場を強化するためで、〈卑彌呼〉の実権がどうだったかにかかわらず、日本側の見事な外交感覚である。

日本全体としてみれば、これは、公孫氏によってさえざられていたシナ王朝との国交の回復でもあった。

日本の正史『日本書紀』では、ほぼこの時代と推定される崇神天皇紀に、任那の地（弁韓のなかの加羅）から蘇那曷叱知なる人物が大和朝廷に朝貢してきたとされている。

どの国の正史でも、古代のものは、自分の国がへりくだった時のことは記されていない。

とくに『記紀』は、日本は大陸から独立するぞ——という気概のみなぎった時代に編纂されているので、朝貢に來た話は記されても、その逆は記録が残らなかったか、あるいは無視したか、したのである。

しかしすくなくともこの時代に半島との交流があったことはたしかで、日本の正史にちゃんと記載されているのだ。

◎高句麗の南下と任那の拡大

その後の朝鮮半島は、高句麗コウクリの力が強まり、四世紀前半には楽浪郡ラクロウは高句麗の領土となつて、シナ王朝の植民都市は数百年の歴史を終えた。

高句麗はもともと鴨緑江オウリョクの北側に本拠地をもち、現在の中国領にまでまたがる地域を支配した国で、その住民は北方の騎馬民族の血をひいていたと考えられている。

それが豊富な騎馬軍団によつて朝鮮半島を南下して領土を拡大したのだ。

それと同時に図3・2で馬韓バカンとされている付近が、日本と友好を結んだ百濟クダラとなり、辰韓シンカンとされている部分のちに敵対する新羅シンラキとなり、そして弁韓ベンカンの部分が、日本の領土としての任那ミマナとなつた。

百濟と新羅の建国は四世紀半ばごろとされている。

百濟は馬韓の一国だった伯濟ハクサイが、新羅は辰韓の一国だった斯盧シロが、それぞれ周囲の小国群を併合してつくつた

国だったが、日本領の任那は、つぎのような経過で確立したらしい。

前述のように、三世紀前半に朝鮮半島南端の弁韓の一部に加羅カラ（または加耶カヤ）という国があつた。

それは『魏志倭人伝ギンワジンデン』で倭国の一部とされている狗邪韓ココクとたぶん同じとされ、そこに日本人が多く進出していた。

もちろん国といつても今の国とは違い、一種の集落である。

日本ではそれを任那ミマナと呼んでいたわけだが、四世紀になつてこの国——集落——がしだいに勢力を拡大して周囲の小国を従え、もとの弁韓全体を支配するようになったのだ。

この時代前後には優れた人材が任那地区はじめ半島諸国から渡来して日本文化に貢献したことが『記紀』や『万葉集』にも記されているが、任那の指導層には日系が多かつたと考えられている。

その後の日本は、シナ大陸の三国時代につづく王朝である晋シン・隋ズイ・唐トウと外交しつつ、高句麗や新羅と敵しい軋アツ轢レキをくりかえし、西暦四〇〇年前後には高句麗の好太王コウタイオウ

軍と半島深部で大激戦を演じて、任那を中心とした半島での日本勢力を拡大した。

これは〈神功皇后ジングウコウゴウ〉からつぎの應神天皇オウジンの御代にかけてのことだったらしいが、こうして日本の勢力圏である任那は弁韓にとどまらず、馬韓（百濟）や辰韓（新羅）を圧して三韓のなかで最大の面積になった。

しかし国力は長くは続かず、繼體天皇ケイタイの御代に半島での日本勢力は縮小・弱体化し、西暦五六二年には任那を新羅に奪われ、六六三年の白村江ハクスキノエの戦いで破れてついに友邦国の百濟も滅び、〈卑彌呼ヒミコ〉の時代以来四百年以上つづいた朝鮮半島の足場を失って、日本は次第に内にもこむようになるのである。

西暦四〇〇年前後の應神天皇らの朝鮮経略ののちしばらくは、日本は三韓の盟主としてその地を安定させる責任をもっており、任那ミマナの地に日本府という役所を設置して行政をつかさどり、三韓に混乱が生じるたびに大和朝廷の軍がかけつけて問題を処理していた。

高句麗に攻められた百濟や新羅を救うために大伴・物部といった豪族が活躍したのだ。

たとえば西暦四〇〇年代後半には、百濟クダラが高句麗コウクリに攻

められて滅亡しそうになったとき、日本が軍事支援して王城を南に移して百濟を再興させている。

◎任那の滅亡と日本の危機

しかし、西暦五一〇〜五三〇年ごろと推定される繼體天皇ケイタイの御代に、神武ジンム以来の重臣である大伴一族の判断で半島南西端にあった任那四県を、要望に応じて百濟に割譲してしまったことから、危機が拡大した。

この割譲は〈神功皇后〉の時代に済州島サイシュウトウを百濟に与えたという伝承以来の事件であった。

繼體天皇は世継ぎ不足という混乱の時代に地方から迎えられた天皇であり、国内の乱れが任那の経営に影響したことがうかがえる。

この四県割譲が原因で任那に混乱が生じ、やがて新羅による任那侵略がはじまった。

そしてこれを阻止すべく大軍を派遣しかけたとき、九州の筑紫の国クニノミヤツコ造イワイだった豪族の磐井が、新羅にそそのかされて叛乱をおこした。

有名な「磐井イワヰの乱」である。

この乱によって新羅シラギを抑えることができなくなり、外交方策に転じたがうまくいかず、新羅の策略にしてやられるようになる。

しばらくして第四章のトビラの歌にある大伴狭手彦サデヒコらが奮戦して成果をあげたが、それも一時的なものであった。

そして結局、大和朝廷では、新興の蘇我ソガ一派が巧みな策略を弄して大伴一族に任那経略失敗の責任をとらせて追放し、蘇我と物部の抗争をへて大化改新にいたって蘇我も亡び、豪族単位の政治をやめて法治国家をめざすようになるのである。

西暦五六二年に新羅に攻められて任那を失ったのは、第二十九代欽明天皇キンメイの時代であり、『日本書紀』に詳しくその経緯が書かれている。

西暦六六三年の白村江ハクスキノエの戦いは、日本と百済クダラの連合軍と、唐トウと新羅シラギの連合軍の間でなされ、日本側が大敗して百済は新羅にのみこまれたのだが、それは大化改新で知られる中大兄皇子ナカノオオエノオウジ（天智天皇テンチ）と藤原鎌足カマタリの時代であった。

この敗戦によって日本の防衛が危うくなり、急遽〈大

和ワの飛鳥アスカから守りに強い大津オオツに都を移し、沿岸にたくさんノロシの城を築いたり、沿岸から都に危機を知らせる狼煙制度を作ったりした。

飛鳥アスカの都の北西は山を越えて広い河内カワチや和泉イヅミだが——神武東征ジンムトウセイの話でわかるように——その地形は今と違って入江が生駒山系イコマにまで深く入り込んでおり、海と飛鳥はすぐ近くだったので、海への交通にはよいが国防の観点からはとても危険だったのだ。

このときの飛鳥から大津への移転劇に涙してできたのが、第二章のトビラ裏にある、天武天皇テンムの寵をうけたのち天智天皇テンジの愛人になったとして有名な額田王ヌカタノオオキミの歌である。

三・五

〈卑彌呼〉以後の東アジアと

日本の安全保障

◎新羅の制覇から現在まで

さて、唐と結んで半島で勝利した新羅は、やがて高句麗も滅ぼし、西暦六六八年（天智天皇の時代）に朝鮮全土を統一する。

そのあと掌を返した唐に攻められ、日本もハラハラするが、なんとか七年間の戦争に耐えて、シナ王朝の係属になりながらも、新羅の半島支配は九三五年（平安時代中期）まで続いた。

この統一新羅の時代（奈良・平安時代）には、日本の力は弱まり、しばしば対馬や九州沿岸を新羅人らに荒ら

されるようになった。

統一新羅は西暦九三五年に滅亡し、そのあとは十四世紀までが高麗の時代だが、末期には、蒙古のフビライ（ジンギスカンの孫）が唐の後継の宋を滅ぼして建国した元王朝が隆盛をきわめ、高麗はその支配下に入った。

西暦一三二〇年代、北条時宗の時代に、元寇という空前の危機が日本を襲うが、その主導は元王朝だったとはいえ、軍勢の多くはシナと朝鮮の兵士であり、とくに高麗の朝鮮兵によつてたくさんの日本人が殺された。対馬などはほとんど皆殺しだった。

大陸では西暦一三六八年に元が滅びて明王朝ができるが、それからまもない一三九二年に高麗は李氏に滅ぼされ、半島は李氏朝鮮の時代となった。

李氏朝鮮も高麗につづいてシナ王朝に服従して属国的な立場にあった。

そもそも「朝鮮」という国号も、シナ王朝の明国に定めてもらったものであった。

そして日本に対しては常に居丈高だった。

高麗滅亡の理由のひとつとして、倭寇との戦いによる疲弊があつたとされているが、とうじの倭寇は日本人が

主体とはかぎらず、いまの福建省など大陸沿岸部や朝鮮半島沿岸部の海賊が多かったらしい。

高麗を滅ぼした李氏朝鮮は、十六世紀末の豊臣秀吉による朝鮮征伐で日本と苛烈な戦いをしたが、日本の撤退でことなきをえ、日露戦争において遼東半島の付け根で日本がロシアと戦った末、明治四十三年に日本が併合するまで存続した。

秀吉の朝鮮出兵は世界史にも大きな刺激を与えた。清国の建国にもナポレオンの野心にも影響したとされている。

そして、昭和二十年に日本が撤退してから、共産勢力の南下による米ソの対立構造がはじまり、ソ連・中国・アメリカを巻き込んだ昭和二十五年から二十八年にかけての朝鮮戦争の結果、北に朝鮮民主主義人民共和国、南に大韓民国が成立し、西暦二〇〇一年の現在まで、不安定な国際情勢の源となっている。

そして日本との間にも、竹島問題をはじめとして、領土・経済・政治・拉致・教育干渉・環境汚染など困難な問題が山積している。

とくに昭和二十年から三十年代にかけての李承晩時代^{リシヨウバン}の韓国は、日本固有の領土である竹島を武力で奪い、数千人の日本漁民を不法に拉致するなど、やりたい放題であつた。

なお、韓国の金泳三大統領は主に昔の新羅^{シラギ}を本拠となし、その地域出身者を要職につけ、かつ対日発言は厳しかった。

一方つぎの金大中大統領は主に昔の百濟^{クダラ}を本拠にし、やはりその地域出身者を要職につけ、対日発言は——基本的には——ソフトである。

旧高句麗^{コウクリ}の北朝鮮は北京政府やロシアとコンタクトしつつ、旧新羅にも旧百濟にも日本にも厳しい。

つまり、大陸と朝鮮半島と日本列島の複雑な国際政治情勢は、「弥生時代」「古墳時代」から現在まで、じつに二千年以上ものあいだ、ほとんど同じ力学のもとに、日本の安全保障に関係してきたのである。

◎朝鮮半島との関係は弥生時代から

ざっと朝鮮半島近辺の歴史をたどってみたが、朝鮮の史書の『三国史記』をみると、こまかな信憑性や年代は別にして、ひじょうに古くから——年代どおりとすれば紀元前から——日本人が朝鮮半島の北方まで進出し、交易や抗争を展開していたことが記されている。

この半島との古くからの関係は、日本に紀元前のシナの鏡や剣や各種青銅器類が残されていることや、考古学的遺跡の比較からも、検証される。

日本の遺跡から見つかるもつとも古い鏡は紀元前三世紀とされ、紀元前一世紀になるとかなり多くの銅鏡が発見されているし、弥生時代の青銅器に使用された金属がほとんどシナ大陸産であることも、鉛同位体比法という方法によって確認されている。

おそらく、有名な秦の始皇帝の時代——日本では弥生時代の前期——には、農業・織物・金属などの大陸の文物が日本に流入し、交易がなされていたのであろう。

始皇帝の意をうけて、不老不死の仙薬を求めて海を渡り、熊野に漂着してそのまま日本に留まったという徐福伝説の真偽は不明だが、〈卑彌呼〉の時代よりはるか昔の紀元前三世紀にすでに——たぶん縄文時代からすでに——

——大陸との人的交流が、組織的ではなかったとしても、なされていたことは確かである。

そしてその交流に朝鮮半島が重要な役割を果たしたのは当然であり、とくに紀元前一世紀以後になると、その輸入品の多くは、間違いなく半島の植民地楽浪郡・帯方郡などを経由して渡来したのだ。

奴国の金印もその一環であろう。

さいきんの発掘調査によって、日本海沿岸と《大和》をむすぶ狼煙通信の施設がすでに弥生時代からあったらしいことも、わかりつつある。

『三国志』の『東夷伝・韓の条』に、

「弁韓や辰韓は鉄を産し、倭人はここから鉄を入手しており、交易には銭のかわりにその鉄を用いている」

——と記されている。

弥生時代末期の日本人にとって鉄がきわめて重要な資源であり、鉄を求めて朝鮮半島で活躍していたことがよくわかる記述である。

この記述は、^{タイホウ}帯方郡のすぐそばの地域での見聞記なので、『三国志』のなかでもとくに信憑性はたかい。

だから、三世紀の〈卑彌呼^{ヒミコ}〉の時代に、朝鮮半島との交易や競争があつたり、日本と公孫氏・^{コウソンシ}楽浪郡・帯方郡との外交があつたりしたのはむしろ当然であつて、そのときすでに数百年の交流経験があつたのだ。

さらに第七章に示す『三国史記』新羅本紀には、〈卑彌呼〉が若いころの三世紀初頭に、辰韓の地で日本軍とこの王とが戦つたとさえ記されている。

だから、つぎの四世紀とされる〈神功皇后^{ジンクウコウゴウ}〉の三韓征伐の伝承も、史実を反映しているのは確実である。

日本と朝鮮半島の国々との困難で重要な関係は、明治時代の日清・日露戦争に始まつたのではなく、遠く紀元前の弥生時代からあつたのだ。

◎任那は古代日本固有の領土である

朝鮮半島の南端部における日本の勢力が、いつごろか

らあつたのかについては、いろいろな見解があるようなので、著者の率直な意見を記しておきたい。

^{ミマナ}任那という地名で代表されるこの領土については、過激な異論もある。

それは、韓国の学者だけでなく戦後の日本の論者にもあるのだが、

A 「まったくの嘘であり日本人が朝鮮半島に進出などしていなかった」

B 「日本が朝鮮という国を侵略して任那という植民地をつくつたのはけしからん」

――の二種類である。

このうちAはおよそナンセンスな説である。朝鮮半島南部における日本の勢力については、日本の古文書だけではなく、シナ正史にも朝鮮正史にも、さらには高句麗王の碑文にさえも記されており、否定のしようがない。

Bについては多少の説明がいるかもしれない。

^{ミマナ}任那についてのものとも古い記録は『魏志倭人伝^{ギシワジンデン}』にある倭領・^{クヤカンコク}狗邪韓国（^{カラ}加羅とほぼ同地域すなわち任那の前身）だが、そのほか同じ『三国志』の韓の條にも、韓

の人たちの住む地域の地理について、

「東西は海だが南は倭との境だ」

——とあるので、シナ王朝が狗邪韓国を日本の一部と認識していたことは明白である。

『三国志』には信用しにくい記事も多いのだが、狗邪韓国は魏^キの植民都市の帯方郡^{タイホウ}のすぐそばで、歩いて数日のところだから、その記述は信用できる。

したがって二世紀ごろに多くの日本人が任那の地にいたのは確実なのだ。

この任那がいつごろできたのかは不明だが、縄文時代の前には陸続きだったのだし、紀元前から交易がなされていたことは遺跡からの鏡などの出土品ではつきりしているわけで、かなり古く、すくなくとも弥生中期からあったと考えられる。

紀元前後の三韓は原始状態の山野に弥生的な集落が点在していたていどの地であり、ひとつのまとまった国ではなかったから、そこに日本人の大きめの集落「任那の原型」があったとしても、それは自然にできたものであって、植民したとか侵略したとかいった話にはならない

であろう。

現在のロシアや中国は広大な領土を有しているが、それはたかだかこの数百年のあいだに現地人を駆逐して拓げたためである。

しかしその多くは現在、国際的に固有の領土として認められている。

したがって二千年も前に自然のうちにできた任那が日本固有の領土だったのは当たり前前の話であり、もし侵略という言葉をしてしても使いたいのであれば、前述のように六世紀から七世紀にかけて「新羅に侵略された」というほうが当たっているであろう。

もつとも厳密には、五世紀以後は、三韓全体の盟主が日本で、任那の日本府はその事務所的な役割であり、日系の人物が百濟などの要人としてたくさんいたと考えられる。

なお任那^{ミマナ}というどくとくの地名は、在位が三世紀と考えられる崇神天皇^{スジン}の諱^{イミナ}または国風諡号^{シゴウ}の「ミマキイリヒコ」からつけられたと、『日本書紀』には記されている。

三・六

謎の多い七つの対魏外交記録^キ1

——景初三年^{ケイシヨ}——

〈卑彌呼^{ヒミコ}〉の時代の東アジア情勢を概観したところで、『魏志倭人伝^{キシワジンデン}』の原文にもどろう。

裸国、黒齒国・・・といった空想的な記述がおわると、またとつぜん現実にもどり、外交記録がはじまる。

これは断片的ではあるが、魏^キの都での記録を元にして、信憑性^{シンビョウセイ}はかなり高いと考えられている。

記録は七項目に分けることができる。

以下、本節と次節で順次説明してゆく。

〈一〉景初三年^{ケイシヨ}（明帝^{メイテイ}・叡^{エイ}の年号／西暦二三九年）六月

記された外交記録の最初は、景初三年、西暦換算で二

三九年である。

すなわちこの年、倭の女王（卑彌呼^{ヒミコ}）の使者である大夫^{タイフ}の難升米^{ナシメ}らが帯方郡^{タイホウ}にきて、魏^キの皇帝に拝謁したいと申し出た。

そこで、魏の役人でもある帯方郡の太守^{タイシュ}の劉夏^{リュウカ}は、部下に難升米らを引率させて、魏の都の洛陽^{ラクヨウ}に送った。そして難升米らは魏の皇帝に種々の宝物や男女を献上した——と述べられている。

この景初三年という年は、現在の写本では二年となつてゐるが、それは写し間違いで、ほんとうは三年だろうと、他の文献や魏国と周辺国の事情などから推定されている。

『日本書紀』の引用にも三年と記されているので、ここでは三年としておく。

難升米の読みは、ナンシヨウメという説もあり、いろいろである。もともと発音不明の文章を史家が推定しているものなので、他の多くの人名地名の読みについても、意見がいろいろある。

難升米に直接対応できる人名は日本側の史書にはないが、あとでも魏の皇帝から旗などを下賜されているので、いまでいえば、外務大臣とか有力大使とかいった身分の

人間だったのであろう。

内藤湖南による有力な説は、難升米は古代に外交を担ったと『日本書紀』にある田道間守（但馬の守）の一族だというものである。

漢字でみるとまったく違う人物に思えるが、シナの発音は濁音がしばしば清音になるので、「タジマ」を「タシマ」と発音すれば、「TASIMA」となり、「NASIME」とよく似ているのである。

魏の元をつくったのは吉川英治の『三国志』で有名な曹操だが、初代の皇帝になったのはその子の曹丕で文帝といわれた。

景初というのは、文帝の息子で魏の二代目の皇帝になった叡すなわち明帝の年号で、元年が西暦二三七年にあたる。

だから景初三年は西暦二三九年になるのだが、この年の正月には明帝は没し、まだ少年の曹芳が即位していた。またこの年は公孫氏一族が魏の司馬仲達らによって滅ぼされた翌年にあたっていた。

何らかの方法でその事件を知った（卑彌呼）たち日本の指導層が、ただちに公孫氏への挨拶を魏の新帝への挨拶

に切り換えて贈り物を届けたわけで、三世紀の日本の政権が、大陸や半島の国際情勢に敏感に反応して、巧みに外交上の手を打ったことがわかる。

また、半島や大陸の情勢が即時に把握できていたことは、すくなくとも半島との間では、交易などの人的交流がさかんになされていたことを意味している。

帯方郡の太守の「太守」とは、郡の長官のことで、植民地の最高責任者の役職名である。

〈二〉景初三年（西暦二三九年）十二月（一）

——重要な詔書の内容——

倭国のこの朝献に対して、その年の十二月、魏の皇帝は、（卑彌呼）にたいして詔書を出した。

この詔書の内容は重要なので、三品彰英による訳文を、一部省略して掲載する。

「汝を親魏倭王卑彌呼に任命する。帯方郡太守劉夏が使者をつかわし、汝の大夫難升米と次使都市牛利（読み方は諸説あるがはつきりしない）を送り、汝の献じた男の生口四人、女の生口六人と班布二匹二丈（縞模様の布十四メートルほ

ど）を奉じて、わがもとに到着した。汝の国は、はるか遠くにあるにもかかわらず、こうして使者を遣わし貢献してきたのは、汝の忠孝のあらわれであろう。そこで私は汝を大変慈しみ、いま汝を親魏倭王とし金印紫綬（金の印と紫の紐）を与えようと思う。装封して帶方郡太守に托し汝に授ける。汝は倭人を綏撫（安んじいたわること）し、つとめて我に孝順をつくすようにせよ。汝の遣わした使者難升米・牛利等は遠路を苦勞してここまでやってきた。その功を認め、いま難升米を率善中郎將（護衛武官の長）、牛利を率善校尉（護衛武官）とし、銀印青綬を与え、彼らを引見し、汝の賜遣をねぎらって送りかえすであろう。また絳地交龍錦五匹（赤地に蛟龍模様のある錦）、絳地シユウシユクケイ（細い毛羽のついた薄い赤地の織物）十張、セン絳五十匹、紺青五十匹を与える。これらは汝が献上した贈り物の価値に相当するものである。また特に汝には紺地句文錦三匹（紺色地に曲線模様のある錦）、細班華ケイ五張（細いまだら模様の毛織物）、白絹五十匹、金八両（黍二万粒の重さ）、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠鉛丹各五十斤（鉛

丹は顔料の一種、五十斤は黍二百万粒の重さ）を与えよう。これらの品物はすべて装封して難升米と牛利に託したから、彼らが国に帰ったならば、記録して受け取るように。なおこれらのすべてを汝の国の人々に示し、魏の国が汝を慈しんでいることを知らさなければならぬ。だからこそ鄭重に汝に良い品物を与えるのである」

シナ王朝から見ればはるか辺境の途上国の女王への返礼にしては、かなり長く、丁寧な文章である。またそこに書かれている品物も、〈卑彌呼〉が献上した品よりも——人間を除けば——はるかに豪華である。

金印の称号も一世紀の奴国より一段上だし、銅鏡百枚というのもシナ王朝としては異例の豪華さである。

これは、朝鮮半島の経営に苦しんでいるので、その向こうの日本を味方につけようとする司馬氏ら魏首脳の間交近攻策によるものだろうとされている。

〈卑彌呼〉が贈ったもののうち、生口（訓ではイクチ）と書かれている男女計十人が問題であるが、この実態については、たんなる奴隸という説、技能者という説、留学生という説まで、議論が分かれている。

ただ一種の奴隷だったとしても、いまの言葉でいえば召使いであり、アフリカからアメリカ大陸に連れてこられたような種類の奴隷ではないであろう。なんらかの技術を持った人間が、忠誠を表すために贈られたのだろうし、のちに日本にもどっただろうという説もある。

〈二〉景初三年（西暦二三九年）十二月（2）

——証拠は見つかるのか——

つぎに問題なのが、金印と銀印と五尺刀と銅鏡である。他の品物は大切にされたとしても、現在まで残る可能性はすくない。

しかし金印・銀印・刀・銅鏡は、保存状態が良ければ、残存していて遺跡から出土する可能性がある。神社に伝世されていることすら考えられる。

金印はもつとも劣化しにくい金属でできているし、博多湾から一世紀らしい金印が綺麗なままで発見された例もあるので、今後どこかから見つかる可能性は大であるが、なにしろ一個だけなので、僥倖を期待するほかはない。

銀印は使者に与えられたもののなので、その使者の居住地付近を探さなければならぬが、それがまったく不明

なので、これもまた偶然をまつほかはない。

五尺刀の定義はわからないが、遺跡からシナ製らしい大刀が出土する例があるので、どこかに眠っている可能性はあるが、刀は錆びやすいし、二口だけなので、発見は困難であろう。

ひよつとするとすでに発見されているのかもしれないが、同定は困難である。

その点、三番目の銅鏡は、『魏志倭人伝』の記述が正しいとすれば百枚もあるし、錆びにくいし、副葬品にする習慣もあったから、古墳や宮殿跡から発見される可能性は、かなり高い。

銅鏡は、銅・錫・鉛・銀などの合金（青銅）で出来ているが、この合金は純金ほどではないにしても丈夫で腐食しにくく、かつ加工も容易で、現在でも似た成分のものが工業製品に使用されているくらいである。

というわけで、銅鏡こそ、『魏志倭人伝』の記述を裏づける証拠品として有望なのだが、すでにそれらしい鏡はかなり多く見つかっている。

図3・3はその代表例で、大阪府泉の黄金塚古墳から



図3・3 大阪府の黄金塚古墳から出土した景初三年銘の鏡
(三品彰英編著『邪馬台国研究総覧』(創元社)より)

出土し、景初三年の銘が刻まれている評判になったものである。

これは古鏡の分類では「景初三年画紋帯同向式神獸鏡」と呼ばれているが、とにかく、〈卑彌呼〉が使者を送ったとされる景初三年という文字が刻まれているのだ。

また平成六年になって丹後の山上の古墳から青龍三年の銘のある「方格規矩四神鏡」が発見された。この青龍三年というのは西暦二三五年で、〈卑彌呼〉が百面の鏡を貰った四年前の製作であり、これも百面のうちかもしれない。

ない——といわれている。

似た鏡は他にも見つかっており、景初四年とか正初元年(いずれも西暦二四〇年で難升米らが日本に帰った年)といった銘のあるものも発掘されている。

とくにさいきは「三角縁神獸鏡」はじめ数多くの発掘が続いている。

〈卑彌呼〉に贈る——といった文字はどこにも無いので、どれが前記の銅鏡百枚のうちなのかの判定はつきにくい。が、考古学者の地道な研究によって、かなり絞られつつあるようである。

そしてそれらの発見が畿内に多いことが認められ、上記の詔書の真実性を裏づけるとともに、「邪馬台国」大和説」に有利な展開になりつつあるらしい。

三・七

謎の多い七つの対魏外交記録2

—正始元年から泰始二年まで—

〈三〉正始元年（セイシ 廢帝・芳の年号／西暦二四〇年）

前節で引用した詔書のなかに、

「一般的な宝物は難升米ナシメに直接渡したが印綬は大切なものなので使いの難升米には渡さず、魏の植民地の役人である帶方郡タイホウの太守タイシュに預けて運ばせた」

——と受け取れる記述があるが、その約束どおり、翌年の正始元年（景初四年相当）に帶方郡の太守が使者を〈卑彌呼ヒミコ〉に送った記録がある。

すなわち、魏の皇帝の前記命令を聞いた帶方郡の新任太守キウウジユンの弓遵テイシユンが、部下の梯儁たちを倭国におくって、詔書や印綬や宝物を倭王にもたらしたことや、倭王がそれ

に答礼して上奏文を出したことが記されている。

正始セイシとは三代目の曹芳ソウホウの年号で、この皇帝はのちに司馬一族の圧力によって退位させられたので廢帝と呼ぶ。二代目の明帝には実子がなかったので、齊王・曹芳という親戚を養子にして三代目の皇帝に指名したのだが、幼年だったため、事実上は重臣の司馬仲達シバチュウタツらが政治を取り仕切っていた。

魏の軍師だった野心的な司馬氏は次第に権力を得て、魏の三代目や四代目を退位させて、三国時代の次である晋シンを建国するが、この晋の時代に『魏志倭人伝ギシワジンデン』が書かれることになる。

さて、この皇帝・曹芳に対する答礼の文を、日本側が魏の使者——帶方郡の使者——に渡したということは、当時の日本の指導階級が漢字の読み書きができたことを意味しているようにも思えるが、帶方郡の役人が依頼されて作文したとも考えられるので、断言はできない。

しかし〈卑彌呼〉や使者・難升米たち指導者層に識字者がまったくいなかったら、魏との外交それ自体を考えなかったであろう。

いろいろな研究から、日本列島に漢字が入ってきたのは紀元前三世紀にまで遡り——古墳から出土する鏡に記された漢字からもそれは感じられるが——〈卑彌呼〉の時代の百年前にはかなり入っていたらしい。

だから〈卑彌呼〉たち指導層は、おおまかには漢字で記された文書を理解できた筈だし、自分で漢字文を記すことも、多少はできたであろう。

もちろん、漢字を活用して日本語を巧みに表記する『万葉集』のような方法は開拓途上だったろうし、漢文による表現も、そう普及していたとは考えられない。

日本人のなかでもとくに学者肌の人たちが、漢字を前にして、これをどう扱うか、試行錯誤していた時代だったであろう。

それから、この文章をそのまま信じると、帯方郡の高官がじつさいに《邪馬台国》^{ヤマトイコク}に来て〈卑彌呼〉に面会して金印などを手渡したことになるが、それはきわめて疑問で、前述のように九州北端の伊都国^{イト}までしか来ず、そこに留まって、伊都国から《邪馬台国》^{ヤマトイコク}までは日本の役人が往復して運搬・伝言していた——とする意見が多数派である。

このことは、『魏志倭人伝』全体からも読みとれること

であり、著者もそうに感じている。

〈四〉正始四年（西暦二四三年）^{セイシ}

この年、ふたたび倭王が使者の伊聲耆^{イサンガ}や掖邪狗^{イサカ}ら八人を送り、各種の織物や弓矢と生口を献上し、使者八人は褒美として率善中郎將の位と印綬を授けられたことが記されている。

倭王への返書については記されていないが、もつともらしい文書を出したと考えられる。

なお伊聲耆と掖邪狗の読みには諸説あり、同一人物のくりかえしだとの意見もある。

〈五〉正始六年（西暦二四五年）^{セイシ}

魏の皇帝はこの年、倭の難升米^{ナシメ}に黄幢^{コウトウ}（黄色い旗）を贈ることにし、帯方郡^{タイホウ}に託した——と記されている。

黄幢の下賜というのは、難升米を魏の皇帝の子分として正式に認め、官位を与えたという意味のようである。幢は旗の意味だが、主に軍隊の指揮に用いる旗をいい、幢主という和一軍の大將という意味になる。

この記述を読むと、難升米がその後も大きな役割を果

たしていたことがうかがえる。

おそらく北九州と帯方郡を行き来しながら《邪馬台国》の窓口となっており、そのことが魏の皇帝に聞こえたのであろう。

〈六〉正始八年（西暦二四七年）

この年、弓遵戦死のため帯方郡の太守が交替して王頔なる人物が任命されると、ただちに〈卑彌呼〉はこの新太守に截斯烏越たちを使者として文書を送って、

「狗奴国の男王卑彌弓呼と攻撃しあっている」

——と知らせた。

そこで帯方郡の新太守は、詔書と黄幢を、使者の張政たちに持たせて、難升米に仮に授け、さらに檄文を作つて〈卑彌呼〉に告諭した——とある。

これは日本国内の戦争を意味するきわめて重要な情報なのだが、原文があまりに簡単で、はつきりしたことはわからない。

正始六年に魏の皇帝が帯方郡の太守に託した黄幢や文

書は、この年になつて〈卑彌呼〉からの使いが来るまでは、手元に置いておいたのかもしれないし、まったく別に、帯方郡の役人が——魏の皇帝の意を汲んで——新たに〈卑彌呼〉への黄幢と詔書や檄文を、難升米を介して与えたのかもしれない。

いずれにせよ難升米は、伊都国あたりで張政に会い、褒美を貰つたり、《邪馬台国》の意図を伝えたりしていたのであろう。

原文のなかの檄文とは布告のようなものであり、告諭とは告げさとすといった意味である。

解釈すれば、狗奴国がなかなか《邪馬台国》のいうことをきかず、しかも強くて攻めきれないので、女王は困り、魏の皇帝のお墨付きを得て自分の権威を高め、その権威で平定しようとしたのであろう。

『日本書紀』には九州の熊襲や関東の毛野が朝廷に背いて困つたという話がたくさん出てくるから、前述のように、狗奴は熊襲または毛野だという説があるわけである。つぎに男王卑彌弓呼についてだが、これは前記したように書写時の間違いで、卑弓彌呼ではないか——という説が有力である。

じじつ、同じ狗奴国の官の名を狗古智卑狗としており、

末尾に「ヒコ」がつけられている。

〈七〉泰始二年十月（晋の武帝の年号／西暦二六六年）

〔臺與〕の代になってからのことで紀年は推定〕

〈卑彌呼〉を——なんらかの意味で——継いだとされる若い〈臺與〉も、国を治めるのに苦労したらしく、それを知った張政らが、同様な檄文をもって〈臺與〉を告諭した。

これに対して〈臺與〉は、先の掖邪狗ら二十人を御礼の使いにして、張政らの帰国を送らせた。

その使者一行は、張政らを送りとどけたあと、帯方郡から魏の都まで行つて朝献し、男女の生口三十人と、白珠五千孔（なんらかの美石？）、青き大句珠二枚（勾玉？）、異文の雜錦二十四（特異な模様であり高度ではない錦？）を献上した。

——とある。

これが外交記録の最後で、かつ、『魏志倭人伝』そのものの最後でもある。

この〈臺與〉の朝献については、暦年は記されていない

いが、〈六〉の二四七年よりかなり後のことは確かである。晋の史書には、泰始初年（西暦二六五年）に倭から使者がきた——との注目すべき記述があるので、これが該当しているのかもしれない。

すくなくとも『日本書紀』の編纂関係者は、のちの〈神功皇后〉の箇所ですべて述べるように、そう考えていたらしい。これらのことから、張政一行はずいぶん長いこと——十年以上も——日本に滞在していたことになるのかもしれないし、また何度も往復していたのかもしれない。

北九州の伊都国と帯方郡の間を、難升米らとともに رفتり来たりしていたことも十分に考えられる。

日本と朝鮮半島との間の往来は、紀元前からなされていたことが確かなので、三世紀ともなれば、かなりの頻度で往復していてもおかしくはない。

ただ、張政らが伊都国から《邪馬台国》まで出向いてきていたかどうかは、前述のように疑問である。

もし《邪馬台国》が《大和》だとすると、伊都国と《邪馬台国》との往来よりも、伊都国と帯方郡との往来のほうが短時間ですんだかもしれないほど、北九州と朝鮮南端とは近いのである。

幸いにして海が穏やかであつたら、伊都国から帯方郡

までは、船だけの旅ですみ、順調にいけば数日で到着するであろう。

＊

次節では、〈卑彌呼〉の奇妙な死の記述について説明する。

三・八

果たして殺人事件か

〈卑彌呼〉唐突の死

◎興味ぶかい『起居注』の記述

前二節の外交記録のうち〈一〉〈三〉〈四〉は『日本書紀』にも『魏志倭人伝』より——と明記して記載されている。

ただし難升米は難斗米と書かれており、外交の最初は景初三年とされている。

また『日本書紀』は同様な個所で晋の皇帝の言行録である『起居注』を引用して、

「晋の武帝の泰初二年（西暦二六六年）十月に倭の女王が朝献した」

——と記している。

武帝とは魏の軍師として蜀の諸葛孔明や公孫氏と戦った有名な司馬仲達の孫の司馬炎のことで、魏の皇帝を退位させて西暦二六五年に晋の国を創建し、三国で残っていた呉も二八〇年に滅ぼして天下をとった。

蜀はすでに二六三年に滅びていたから、結局『三国志』の三国は晋の国に統一されたことになる。

シナ王朝はこのあと南北朝を経て隋になりついで唐になつて、日本は遣隋使や遣唐使を派遣するようになることはよく知られている。

晋の都は魏と同じ洛陽だったが、日本側は、魏が滅びて晋ができた翌年にすでに、その洛陽に使者を送っていたわけで、〈卑彌呼〉の代が終わってから絶妙な外交感覚をみせている。

同じ天皇紀におけるこの『起居注』の引用は、『日本書紀』の編者——またはそのすこし後の人——がこの記録を『魏志倭人伝』中の上記〈七〉の〈臺與〉による朝献と同定していること、および、〈臺與〉を〈卑彌呼〉と同視していること、を意味している。

これは、あとで『日本書紀』と『魏志倭人伝』を比較

するとき、大きな意味を持つてくる。

いずれにせよこのような引用は、『日本書紀』の編者たちやその少し後の人たちがシナの史書をよく読んでいた証拠であり、また『魏志倭人伝』の類が『記紀』編纂の八世紀初頭またはその少し後の日本の知識人によく知られていた証拠でもある。

『記紀』には遣唐使・遣隋使以前の古い時代のシナ王朝との交流はあまり書かれていないが、西暦紀元ごろはまだ大和朝廷が支配的にはなっていなかったために記憶に残っておらず、したがって書かれなかったのであろう。

紀元前後の日本側の交流の主体は九州北部の豪族だった可能性が高く、そのため「漢委奴國王」の金印も博多湾の近くの奴国と目される土地で発見されたのだと考えられる。

二世紀から三世紀にいたる『魏志倭人伝』の時代やそののちの二世紀くらいあいだには、大和朝廷の力はかなり強くなったと考えられるが、その時代の『記紀』の記録にもシナ王朝への使者派遣の話はない。

『記紀』の元をなす諸史料は、そもそも日本人がシナの冊封体制——シナ皇帝が朝貢してくる周辺国にお墨付き

（封爵）を出し係属国としてのその国の存在を認める体制——からの独立を意識しはじめた時代に書かれたり集められたりしているから、朝鮮半島諸国が大和朝廷に朝貢に來た話や、半島に出兵した話は数多く書かれていても、古い時代に日本からシナに朝献してお墨付きを貰ったような話はあまり書かれていないのであろう。

これは朝鮮半島諸国が近世にいたるまで冊封体制に組み込まれていたのと対照的であり、日本の『記紀』の著者たちが健全な独立精神を持っていた証拠でもある。

◎〈卑彌呼〉とつぜんの死と巨大な墳墓

魏との交流の話が長くなったが、本文に戻ると、〈六〉のあといきなり、〈卑彌呼〉が死んだ——と記されている。

〈七〉の〈臺與〉の使者の話の前である。

何年とは書いていないのだが、なぜ「いきなり」なのかについては、諸説紛々である。

唐の時代に書かれた北朝の歴史を記した北史のなかの倭人伝には、

「正始中卑彌呼死す」

——とあり、正始^{セイシ}は西暦二四九年までということから、それを受けて二四九年以前に死んだのだらうとする説がある。

しかしこの記述は前からあった『魏志倭人伝』を解釈してそう書いたとも受け取れて、信憑性は低いようである。

ただ、さまざまな分野の研究からの総合的な判断で、二四七年からあまり経たずに死んだのは確かだろうとされておられ、これへの異論はすくない。

げんざい多くの歴史家が推理している〈卑彌呼〉の没年は、西暦二四七年か二四八年であり、とくに前後の事情から二四八年の可能性が高いといわれている。

さて、前記の「いきなり」というのは本当にいきなりで、〈六〉の外交記録の最後の、檄文^{ゲキブン}によって〈卑彌呼〉を励ました——と受け取れる——文章のすぐあとに、死の記述が出てくるのである。

議論百出の重要部分なので、石原道博による書き下し

文（岩波文庫）を、掲載しておく。

「……張政等を遣わし……檄^{ゲキ}を爲^{ツク}りてこれを告諭^{コクユ}す。卑彌呼以て死す。大いに冢^{チヨウ}を作る。径百余歩、徇^{ジュンソウ}葬する者、奴婢^{ヌヒ}百余人。更に男王を立てしも、國中服せず。更々^{コモゴモ}相誅^{チユウサツ}殺し、当時千余人を殺す。またまた卑彌呼の宗女^{ソウジョ}壹與年十三なるを立てて王となし國中遂に定まる。政等、檄を以て壹與を告諭す……。」

最初の……以下は〈六〉のおわりであり、最後の政等……は〈七〉のはじめの部分である。

これ以下は前節〈七〉のみであり、

「……雑錦二十匹を貢獻した」

——で『魏志倭人伝』そのものが終わっている。

この〈六〉と〈卑彌呼〉の死と〈七〉の部分の写本の写真を、図3・4に示した。説明すると長いが、原文はじつにあっけないものであることが分かる。

善中郎將印綬其六年詔賜倭難升米壹萬斛付郡假授其八年太守王領到官倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和遣倭載斯烏越等詣郡說相攻擊狀遣塞曹掾史張政等因齎詔書黃幢拜假難升米爲檄告諭之卑彌呼以死大作冢徑百餘步徇葬者奴婢百餘人更立男王國中不服更相誅殺當時殺千餘人復立卑彌呼宗女壹與年十三爲王國中遂定政等以檄告諭壹與壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還因詣臺獻上男女生口三十人貢白珠五千

孔青大句珠二枚異文雜錦二十四

図3・4 『魏志倭人伝』の末尾部分
(三品彰英編著『邪馬台国
研究総覧』(創元社)より)

冢^{チヨウ}とは塚とか墓とかいった意味で、訓読みではツカである。径百余歩という歩は、魏の時代の単位としての歩だとすると、一・四メートルほどである。したがって百余歩は百五十メートルほどになるが、単にとっても大きい——といった意味だったかもしれない。

徇葬は殉葬で、奴婢は男女の召使いである。主人が死んだときに、その部下たちが殉死する習慣は、古代には世界各地に見られ、シナ大陸でも古くから大量の殉死が

あつたらしい。

ただし日本で百人もの殉死がなされたかどうかは大いに疑問で、各種の遺跡発掘の模様から、ほとんど無かつただろう——といわれている。

更々相誅殺とは、お互いに相手が悪いとして殺し合うことであるが、その死者の数千人については、たんに沢山といった意味だったのかもしれない。

◎後継者〈臺^ト與^ヨ〉と〈卑^ヒ彌^ミ呼^コ〉の死の謎

そして最後が、〈卑彌呼〉の死後の、男王では世が治まらず、十三歳の宗女・壹與を男王のかわりに次ぎの女王としてやつと世が静まったという、〈卑彌呼〉の後継者についての重要な記述である。

宗女の宗とは世継ぎとか跡取りとかいった意味で、鬼道をよくする〈卑彌呼〉の正統的な後継女性を意味している。ただし実子であつた可能性はうすい。

この跡継ぎ問題についても、議論が多く出されていて、結論が出ていない。そもそも壹與^{イヨ}か臺與^{トヨ}かもわからない

のである。

『日本書紀』のなかにその候補を探す試みは古くからあるが、それについては第八章以降で詳述する。

もう一つ重要なのが、はじめにもどって、

「張政等を遣わし……檄を為りてこれを

告諭す。卑彌呼以て死す」

——という場面である。

これはどういう意味なのであろうか？

書き下ろし文で読んでも〈卑彌呼〉の死は唐突の感があるが、図3・4で分かるように漢文の原文ではなおさら唐突である。そもそも原文には句読点もなく、改行もないのだ。

そして、どの単語がどこにかかるかも分からないことが多い。

したがってこれは、どうとでも解釈できてしまう。

狗奴国問題での〈卑彌呼〉の訴えを聞いた魏の使者が告諭したために〈卑彌呼〉が死んでしまった——または殺された——とも受け取れるし、檄文告諭の件と〈卑彌呼〉の死とは無関係で、まったく別の文章だとも受け取

れるのだ。

漢文の常であるが、読む人の感覚によってどうとでも受け取れる、論理的に不十分な文章によってきわめて重要なことが書かれているので、議論百出になってしまうのだ。

そして、狗奴国問題の不手際で〈卑彌呼〉が殺されたのではないか、これは殺人事件なのではないか——との説も出されるようになったのである。

ともあれ、狗奴国との抗争や告諭と〈卑彌呼〉の死との関係は不明だが、告諭からいくばくもなく〈卑彌呼〉が死んで、大きな墓をつくったと書かれていることは確かである。

また次に、〈卑彌呼〉の後継者として男王を立てたが国中が服さないので、〈卑彌呼〉の後継者である〈臺與〉を女王にしたところ、やっと国中が平和になった——と書かれていることもまた確かで、読み違うおそれはない。

＊

これで『魏志倭人伝』の概要説明はおわりである。

つぎに、この『魏志倭人伝』の成立の経緯について、
記してみよう。

三・九

『魏志倭人伝』成立の経緯

◎『三国志』の中の『魏志倭人伝』の位置づけ

これまでに断片的に記してきたが、『魏志倭人伝』とは通称で、正確には、魏・蜀・呉の三国の歴史を記した『三国志』全六十五巻のなかの、魏王朝に関係のあった周辺諸種族の話の中のひとつである巻三十『東夷伝』（東の野蛮人の話）の中のさらにひとつにすぎない倭人條——すなわち『倭人について書かれた部分』を意味している。もちろんこの史書『三国志』とは、天才軍師・諸葛孔明で有名な大衆小説としての『三国志演義』ではなく、シナ正史としての『三国志』である。

この正史としての『三国志』は、

魏書（三十巻）

蜀書（十五巻）

呉書（二十巻）

——の三部に分かれ、合計して六十五巻である。

このなかの魏書三十巻は、皇帝について記した、

武帝紀（第一巻）

文帝紀（第二巻）

明帝紀（第三巻）

三少帝紀（第四巻）

——という「紀」と呼ばれる四巻と、后妃や重要人物

の伝記を記した、

后妃伝（第五巻）

董二袁劉伝（第六巻）

・

・

・

烏丸鮮卑東夷伝（第三十巻）

——という「伝」と呼ばれる二十六巻からなっている。

四巻と二十六巻をあわせて全三十巻である。

ただしこの「伝」の最後の巻（第三十巻）は、伝記というよりは辺境の国々の解説であり、「烏丸鮮卑東夷伝」

——という巻題がしめすように、烏丸ウガンと鮮卑センビと東夷トウイと呼ばれる国々の説明である。

このうち烏丸と鮮卑は、昔から蒙古高原を中心にしてシナ王朝領土の北方で覇を競っていた遊牧系の諸部族のなかの二つである。

東夷とは東の野蛮国という意味で、満洲、朝鮮半島、そして日本列島などが入っている。

東夷について書かれた部分は、さらにいくつかに分かれている（図3・2）。

すなわち、

夫余フヨ（満洲北部。高句麗の北、鮮卑の東）

高句麗コウクリ（満洲南部から朝鮮半島北部）

東沃沮トウヨクソ（高句麗の東南部。今の北朝鮮東部）

挹婁ユウロウ（ウラジオストクやその北方）

濊フイ（高句麗や東沃沮の南、朝鮮半島の東側）

韓カン（帯方郡の南、倭の北）

倭ワ（帯方郡の東南の大海の中にあると書き出されている。日本列島）

——といった部分よりなっている。

第三十巻のなかの烏丸・鮮卑・東夷の説明も羅列的であるが、東夷のなかにはさらに羅列的で、明確な節に分かれているわけではない。

倭人についての既述も、辰韓の説明のあと、いきなり倭人・・・とはじまっている。そのため、この日本について記された部分を倭人の條——すなわち『倭人條』——ともいうのである。

そしてこの倭人の條に、既述したような三世紀の日本の様子や外交記録が記されているのだが、それが通称『魏志倭人伝』なのである。

つまり、日本について書かれているのは『三国志』のなかのほんとうに端の端であって、当時のシナの都の著者や読者にとってはもともと重要性の低い、いわば付録の末端のような部分なのだ。

◎『魏志倭人伝』の執筆者

『三国志』が完成したのは西暦二八五年——とされている

るが、これは魏^キのあとの晋^{シン}の時代がはじまって二十年たった年である。

『魏志倭人伝』^{ギシワジンデン}の中身でいうと、〈卑彌呼〉^{ヒミコ}がはじめて魏に使節を派遣した年のほぼ四十五年後、おわりに付け足されている〈臺與〉^{トヨ}が使いを晋に送った話からほぼ二十年のちである。

『三国志』を著述（編纂）したのは陳壽^{チンジュ}という学者だとされている。

陳壽は三国の一つで孔明が活躍した蜀の国に西暦二三年に生まれ、蜀が滅びたあとは、魏の後継国として成した西晋に仕えた人で、没年は西暦二九七年とされている。

では、この『三国志』のなかの倭人の條を、編者の陳壽は何によって書いたのだろうか？

これについては、主に先行する史書『魏略』^{ギリヤク}によったらしいといわれている。

『魏略』は魚豢^{ギョカン}という人物が書いたとされているが、完本は現存せず、一部分が残されているだけなので「らしい」ということしか分からない。

なにしろちゃんと残っている当時の文献は『魏志倭人

伝』の写本のみなのだ。

魚豢は陳壽とほぼ同時代の人なので、さらに魚豢自身が参考にした史料があつた筈だし、両者が共通して参考にした史料もあつたであろうが、それらについては、なおさら推測の域を出ない。

倭国について記されていて今に伝わっている似た史書として、『後漢書倭伝』『宋書倭国伝』『隋書倭国伝』などが知られているが、対象とした年代は古くても書かれたのはいずれも『魏志倭人伝』より新しく、〈卑彌呼〉らの話は『魏志倭人伝』を参考に行っているらしいので、歴史資料としての価値は『魏志倭人伝』に及ばない。

もう少し後世の記録になると、倭の五王（五番目が雄略^{リヤク}天皇であることは確実）の記録（宋書）とか、聖徳太子^{ショウトクタイシ}の時代に小野妹子^{オノノイメコ}が使者となつて対等な挨拶文を渡してシナ皇帝を不快にさせた話（隋書）など、価値の高い資料が見られるようになってくる。

というわけで、陳壽が参考にしたと思われる既知の書物は、一部しか現存しない『魏略』のみであるが、そのほかに伝聞とか報告書とか、もつと古い史書とかの類は、いくつか推理できる。

＊

つぎの章で、『魏志倭人伝』のよってきたる所をくわしく推測し、その信憑性^{シンビョウセイ}について検討してみよう。

『魏志倭人伝』の信憑性について多くの学者が疑問を投げかけていることは前述したが、本書では西尾幹二が『国民の歴史』で述べた意見を、著者の流儀^{フエシ}で敷衍^{フエシ}してみることにする。

